

とりあえず乾杯条例



イラスト／永美ハルオ



北原伸一

Shinichi Kitahara

発声と同時になだれ込む 国家権力

20××年、春。佐々山強志（仮名、以下同）のケータイのLINEに、故郷の母校の同窓会を知らせるメールが届いた。地元高校を卒業後、新幹線に飛び乗り東京の大学へ進学、就職難のデフレ不況が収まりかけたところに、なんとか希望の職種に就けることができた佐々山は、日々の仕事に忙殺され、いや煌びやかな東京での暮らしに倦り、29歳のこの年まで故郷へ帰省することはなかった。

「懐かしいな。たまには悪友どもの顔を見に帰るとするか」

そう独り言ちた佐々山は、交際5年になる彼女の両親への紹介も兼ね、ゴールデンウィークを利用して10年ぶりに故郷の地に舞い戻った。

「優しいご両親で安心したわ。さっそくお義母さんから「おふくろの味」を伝授してもらわなくっちゃ」

大歓迎に相手を崩しっぱなしの彼女は早くも「新妻」の雰囲気を漂わせる。

高校の同窓会は6時半から。母から郷土料理を伝授してもらっている彼女を残し、佐々山は会場である町唯一のホテル「こんたつ観光ホテル」の宴会場へと向かった。

「おっつ、久しぶりだな、強志」

授業中に似顔絵ばかり描いていた悪友の昭久が、ビールグラスを片手に声をかけてきた。似顔絵の上手さが高じて地元デザイン会社に勤めたが、地声の大きさは変わらない。

「婚約者、連れてきたんだって？」

地方特有の独特の訛りが懐かしい。

「ああ、同窓会ついでに両親に紹介しようと思つてな。あれっ？ 野西先生はすっかりデキ上がつてんじゃないか？ 酒好きなのは知つてたけど、いくらなんでも早すぎる。横にいるのはクラス

のマドンナ、アヤコ嬢じゃん。田舎での人気だけは健在つてとこだな」

——それでは、ただいまからこんなつ

第一高等学校同窓会を開催します。

司会を務めるのはクラス委員で飼育係だった仲江。大舞台は弱いが、勢いだけでそつなくこなすだろう。恐れていた野西先生の長い説教、いや挨拶が、酔いのおかげで手短かに済んだことが有難い。

——では不肖、クラス委員の私が乾杯の音頭を取らせていただきます。こんなつ第一高等学校の未来の発展と、皆様方との再会を祝してかんぱい。

司会者の発声とともに、参加者全員が高らかにグラスを掲げた。強志も注がれたビールで周りの懐かしい顔とグラスをぶつめた。

その時、乾杯の音頭を待つかのよう

に、スーツ姿の男、数人が会場にただれ込んできた。

「ハイ、そこまでだ。手に持つグラスはそのまま。一切動かないように」

高圧的な態度で、リーダー格と思しき男が1枚の紙を見せて回る。

（地元國酒による乾杯で地産地消を推進する条例違反容疑）

突き付けられた紙にはこう記されていた。なだれ込んできた男たちは地元県警の生活安全課の署員、通称「酒Gメン」だった。

乾杯条例——。日本が世界に誇る日本酒でありながら、国内消費は

1975年の約167万^{キロリットル}をピークに減り続け、いまま低迷中だ。時の

政津浦政権が外交時に、西側諸国の某大統領から「日本人のほとんどが呑

まないのに國酒といえるのか」とツッコまれ、直ちに閣議決定したものだ。た

だ野党から「嗜好品への国の強制力はいかなるものか」とミソを付けられ、

各自自治体による条例制定に留まったという経緯があった。

——ここ田舎町でも遅ればせながら乾杯条例が制定された。しかも飲兵衛

で知られるこの自治体首長は、あろうことか、乾杯条例に罰則規定を設けると

いう信じられない強権を發動。違反者への罰金はもちろん、1年間の酒

造好適米生産に従事という懲役まで

科した。

トラ箱に直行させられた泥酔状態の野西先生を除く参加者全員が、県警の署員に連行されたが、幸いなこと

に強志は初犯ということで立件は見送られ、その日のうちに彼女の元へ舞

い戻つた。しかし、捜査員突入の際、驚いて4合ビンを落として割つてしま

つた昭久は、器物損壊罪も適用され、こつびどくお灸を据えられた。

全国に広がる、乾杯条例

乾杯条例の初制定は、昨年1月15日に施行された「京都市清酒の普及の促進

に関する条例」で、それは全国に瞬く間に広がった。京都は、（全国有数の

清酒（日本酒）の産地です。その京都から清酒による乾杯の習慣を広めること

により、清酒の普及を通して日本人の和の暮らしを支えてきた様々な伝統産

業の素晴らしさを見つめ直し、ひいては日本文化の理解の促進に寄与することを目的）とするという。

ただ、冒頭に記した「20××年、乾杯

条例違反シミュレーション」のように、全国で施行されたどの乾杯条例にも

罰則規定はなく、逮捕されることはない。あくまでも地元

の日本酒の普及を願つて地元議会が率先して盛り上げていこうというこの表れである。実際

京都では、乾杯条例施行後、府内で醸された日本酒の出荷量が30年ぶりに増加に転じている。

最近も条例制定の勢いは止まるところを知らない。

3月19日、茨城県水戸市議会は県内

で笠間市に続き2番目となる「市地元酒等乾杯推進条例」を全会一致で可決、4月1日に施行した。水戸市内に

は日本酒製造の蔵元はもちろん、偕楽園の梅林にちなみ梅酒の生産も盛ん。

日本酒、梅酒のほか焼酎や果実を使った飲料の普及につなげようと躍起だ。

未成年向けに、梅シロップやフルーツジュースもその対象にしている。

同じ日、定例会で「さがえ産の酒で乾杯を推進する条例」を可決したのは山形県寒河江市議会。この日、市内

のホテルや旅館、ヤキトリ屋などで午後6時に一斉に乾杯をするイベントも

行った。

愛知県南知多町議会では、日本酒だけでなく名産の温州ミカン果汁を使つたリキユールもその対象にした

「南知多もぎたてみかん酒及び知多産の日本酒で乾杯を推進する条例」を可決。地元蔵元がみかん酒を開発したこ

とを受けて、普及に町が乗り出した。

宮崎県の都農町議会では、第三セクターで生産する都農ワインをその対象とした「都農ワインによる乾杯普及促

進に必要な措置を講じるよう努力する」という一文を盛り込んだ。

秋田県大館市は乾杯条例が施行された3月17日、市議会と市職員の懇

親会が開かれ、同地域の伝統工芸品である曲げわっぱの製造会社が作った杉のぐい飲みを使い乾杯した。
ヤマブドウと赤ワイン用のブドウを



交配した「ヤマソービニオン」で造るワインで消費拡大を狙うのは長野県上伊郡宮田村議会。昨年12月には「ワインで乾杯宣言月間」と定め、町内の飲食店などで名産ワインを割安で提供した。
熊本県のあさぎり町議会は、伝統の酒器「がら」と小さな盃の「ちよく」で球磨焼酎を飲むという器まで限定した条例を制定。グラスで飲むことが多い現代人に、古から伝わる文化をアピールする。

同じく熊本県の人吉市は、球磨焼酎の普及促進を目的として、「ひとよ」から、米を原料とする球磨焼酎の地域文化を紡ぎ広める条例」案を、市議会定例会に提出。人吉球磨地方の28の焼酎蔵元でつくる球磨焼酎酒造組合が8月8日の「米の日」に合わせ定めた「球磨焼酎の日」の施行を目指す。
便乗組と言っては失礼だが、変わり

ダネもある。北海道の中標津町では若者の牛乳離れを危惧して、「牛乳消費拡大応援条例」を制定。町民に対して、結婚披露宴や忘年会、歓迎会などでの乾杯の1杯目を牛乳でするように協力を求める。こちらも4月1日の施行だ。

日本酒中央会によれば、2月末までに「乾杯条例」が可決された自治体は全国で50にまで及んでいるという。だが、安易な乾杯条例の乱発に警鐘を鳴らす動きもある。

岡山県が制定を目指した「おかやまの酒による乾杯を推進する条例案」に対し、県アルコール関連問題研究会や、県精神科医院協会など4団体が「飲酒による健康障害への配慮が欠けている」として、廃止や修正を求める要望書を提出した。

また、秋田県由利本庄市議会で市長は、「地域の会合で地酒の乾杯が

なり浸透している。酒は嗜好品であり、人によって好み異なる。市民レベルでの取り組みは尊重するが、条例制定は考えていない」と述べた。
酒どころ、新潟県阿賀町議会では、3月の定例会での制定を目指していた「阿賀町ふるさとの地酒で乾杯条例」の提案を見合わせた。やはり地酒という嗜好品の押し付けになりかねないとの懸念から、地酒だけにこだわらず、山菜や自然薯、糍など町の特産品にも範囲を広げてPRできるものにするよう再検討する。

秋田県の湯沢市では、地酒での乾杯は市内ですでに浸透しているとして、日本酒に氷とライムスライスを合わせた湯沢独自の飲み方「ユザワロック」での乾杯を呼びかけるような条例ならどこにも条件付きだ。
いずれの乾杯条例もPR活動の一環であると強調する。
条例化第1号となった京都市では制定1年が経過、今度は日本酒の味比べができる京阪電車の臨時便を運行させた。車両内にテーブルを設え、参加者一人ひとりに、10種の日本酒が振る舞われた。ポスターや幟だけのただのPRだけで終わるなら条例化の意味はない。条例化後の仕掛けが重要だろう。とりあえず、乾杯しながら、考えますか。町長さん。

また、秋田県由利本庄市議会で市長は、「地域の会合で地酒の乾杯が

考えますか。町長さん。

第4回「ワイングラスでおいしい日本酒アワード」 決定! 最高金賞

今年で4回目を迎え、じわじわと定着、拡大を図っているこの「ワイングラスでおいしい日本酒アワード」。世代・業態・国の境界を超えて日本酒を拡げていこうという日本酒業界の熱き心意気が伝わってくる。エントリー数の急激な伸びがその証左である。過去最高の出品数となった今回は、なんと227蔵から492点ものエントリーがなされ、むしろ厳正に審査が求められる審査員の苦労が頭に浮かぶ。

その熱き心意気はこの『コンタツだより』の取材現場でも感じられる。毎回、消費者との接点である酒販店を訪れ経営者に話を伺っているが、ここ数年「ワイングラスで～」を話題に出す酒販店経営者が増えてきているのだ。

「うちもこのイベントにあやかり、お客様にワイングラスで飲む日本酒の美味しさを伝えるようにしました」

「ワイングラスで日本酒を飲むというコンセプトは、いままでまっ

たく気付かなかった。でも芳醇な香りと味わいがグラスひとつでこんなに違うとは…。目からうろこが落ちました」

こうした声が聞こえるようになったということは、アワード関係者にとっては何とも嬉しいことだろう。

4回目となった今回も前回同様、1.8%の2500円以下で中容量の「ワイングラスでおいしい日本酒アワードメイン部門」、「スパークリングSAKE部門」、「大吟醸部門」の3部門に分けて厳正に審査された。各部門の栄えある最高金賞に輝いた日本酒は以下の通りである。

「メイン部門」は231点中9点(入賞率3.9%)が最高金賞に選ばれた。「両関純米酒」(秋田・両関酒造)、「東光 純米吟醸原酒」(山形・小嶋総本店)、「特別純米 和田来 出羽の里」(山形・渡曾本店)、「特撰純米酒 白露垂珠」(山形・竹の露)、「純米吟

醸 蓬莱 家伝手造り」(岐阜・渡辺酒造店)、「白滴 而妙酒 純米吟醸」(奈良・今西清兵衛商店)、「大吟醸 備前雄町」(兵庫・小山本家酒造灘浜福鶴蔵)、「KONISHI 大吟醸ひやしぼり」(兵庫・小西酒造)、「山丹正宗 吟醸酒」(愛媛・八木酒造部)。

「スパークリングSAKE部門」では、出品61点中5点(同8.2%)で、「一ノ蔵 発泡清酒 すず音」(宮城・一ノ蔵)、「六歌仙 ひととき 純米白」(山形・六歌仙)、「人気一 Rice Magic レッド」(福島・人気酒造)、「梵・プレミアムスパークリング純米大

吟醸(磨き二割)」(福井・加藤吉平商店)、「花泡香」(兵庫・大関)が選出。

最後の「大吟醸部門」では、200点の応募があり、最高金賞には「大吟醸出品酒 松右衛門」(秋田・鈴木酒造店)、「秀よし 大吟醸」(秋田・鈴木酒造店)、「秀よし 純米大吟醸」(秋田・鈴木酒造店)、「銀嶺月

山 大吟醸 青ラベル」(山形・月山酒造)、「北雪 大吟醸YK35」(新潟・北雪酒造)、「澤乃井 大吟醸」(東京・小澤酒造)、「鈴鹿川 純米大吟醸 磨き四割」(三重・清水清三郎商店)、「梵・夢は正夢(純米大吟醸)」(福井・加藤吉平商店)、「梅乃宿 大吟醸ゴールド」(奈良・梅乃宿酒造)、「春鹿 純米大吟醸」(奈良・今西清兵衛商店)、「櫻華一輪」(兵庫・櫻正宗)11点(同5.5%)がその栄誉に輝いた。

そして4月22日、最高金賞を受賞した蔵元は、「國酒を愛する国会議員の会」会長である野田聖子自民党総務会長から表彰状と盾をもらいニッコリ。さらにメイン部門で最高金賞を受賞した銘柄は、ANAのファーストクラスでの搭載と空港ラウンジで一定期間採用されることになっているという副賞もついてきた。「空弁ブーム」の次に、「空酒ブーム」到来を予感させる。

